

生徒が見出す歴史授業のレリバンス

—教師の視点を通した—考察—

学籍番号 239315
氏名 波多江海
主指導教員 飯島敏文
副指導教員 鈴木真由子

1. 研究の背景

1.1 問題の所在と研究目的

歴史教育の文脈において、高等学校の歴史総合を受講する生徒は授業のどのような点にレリバンスを見出しているのか、教師の生徒に与える影響力を考慮して明らかにすることを研究目的としている。

1.2 研究課題と研究方法

この目的を達成するため、本研究においては、以下の2つの研究課題を設定した。

研究課題(1) 教育学、あるいは歴史教育におけるレリバンス概念とはなにか、先行研究や学習指導要領をもとに概念を整理し、歴史総合においてレリバンス概念を追究することの意義を明らかにする。

研究課題(2) 歴史総合の授業において生徒が見出すレリバンスの有無を明らかにし、そうしたレリバンスに対して、教師が歴史総合の授業に対して持つ認識、歴史の意味づけがどの程度影響を与えているのか、明らかにする。

2. レリバンスに関する先行研究

2.1 教育学の文脈におけるレリバンス概念の変遷と多様性

社会学の文脈からもたらされたレリバンス概念が教育学の文脈に転移したのち、どのような変遷を得てきたのか、先行研究をもとに明らかにした。

2.2 歴史授業における「レリバンス」に関する先行研究

もともと歴史学において「レリバンス概念」の検討が進んできたが、現在は歴史教育の文脈において、生徒が歴史授業を如何に見出そうとしているのか、研究蓄積が多くなってきている。

3. 歴史総合におけるレリバンスの検討

3.1 なぜ歴史総合を研究対象とするのか

令和4年度から新たに始まった歴史総合は、「現代的な諸課題」について考えることを主目的としている。その中で、二井(2022)は、歴史総合において、「個人的レリバンス」「社会的レリバンス」というレリバンス概念を用いて、研究を進めることの意義を説いている。

3.2 生徒のレリバンス形成における教師の影響力を追究する意義

心理学における勢力資源の概念を踏まえると、教師はつねに生徒に対して影響を与えており、そうした影響が、生徒のレリバンス形成に及ぼす意義がみとめられる。

4. 調査と分析

4.1 質問紙調査の調査結果

実習校において質問紙調査を実施したところ、文系クラス、文理混合クラス、理系クラスの順に、生徒の歴史学習に意味を見出す割合が低下していったことが明らかとなった。

4.2 インタビュー調査の調査結果

実習校におけるインタビュー調査の結果、教師が生徒のレリバンス形成に及ぼす影響は大きく、かつ、受験といった学習文脈が生徒に与える影響も甚だ大きいことが分かった。

5. おわりに

本研究では教師や環境が生徒のレリバンスに与える影響が多きことが分かった。次回以降の研究では、より詳細なレリバンスの定義を先行研究をもとに提示したい。